

# 西南学院の宣教師関連資料の収集と検証(2)

～戦中・戦後のD.C.ギャロットのレポートを中心に～

K.J.シャフナー

## ◇『彼らは何を考えるだろうか』

それでは、「西南学院の宣教師関連資料の収集と検証その2、戦中・戦後のD.C.ギャロット<sup>1</sup>のレポートを中心に」と題して、百年史の研究会での発表を行います。

これは、ドロシー・シェパード・カーヴァーが1935年の9月に来日した時の写真です。彼女は、1909年に生まれたのですが、父親がW.M.ギャロット<sup>2</sup>の神学校の指導教授でしたので彼女はギャロットと日本に来る前からよく知っていました。ドロシーは、1935年に来日しましたが、1938年10月、賀川豊彦先生との会議の時にギャロットがドロシーに「私とマージしませんか？」<sup>3</sup>というメモを渡して、婚約しました。結婚式は、1938年12月29日に西南女学院のチャペルで行われ、彼女の弟が上海で宣教師として働いていましたので、日本に来て司式を担当しました。そのころ日本と中国の関係があまりよくはありませんでした。

今日、取り上げたいと思うのは1938年から1947年の間、ちょうど日中戦争とアジア・太平洋戦争の間の時期にドロシーとギャロットが書いた記事を紹介したいと思います。まず、『彼らは何を考えるだろうか』という記事ですけれども、これはThe Commissionというアメリカ・南部バプテスト伝道局の雑誌に掲載された記事で、匿名で掲載されていました。ちょうど国際社会で日本のやり方がかなり批判されていた



DOROTHY SHEPARD CARVER

ドロシー来日時の写真  
(1935.9)

- 1 D.C.ギャロット (Dorothy Carver Garrott)：アメリカ・南部バプテスト連盟の派遣宣教師で、26歳の1935年に来日し、日本で結婚。夫ギャロットを助け、宣教活動に従事した。
- 2 W.M.ギャロット (William Maxfield Garrott)：アメリカ・南部バプテスト連盟の派遣宣教師で、1934年に来日。戦時中は、抑留所に入ってまで日本に留まろうとし、戦後は新制大学の初代学長として西南学院の発展に貢献した。
- 3 merge：合併の意味。ギャロットは「結婚」の意味で使った。

ころですが、彼女は日本人の一人ひとりを見て、そして考えてほしいと願っていました。

この記事は、「戦争で亡くなった息子の遺骨を埋葬するために運んでいる父親がいました。父親はどこの国でも同じく、子どもに対してやさしく、愛情に満ちていました。私（ドロシー）がこの父親を理解しようと努めている間に、義憤をもって日本という国を非難する国の人々も日本人を一人の人間として見て、この厳しい状況の中で彼らの思いと苦しみを知ることができるようにと願っている」という内容でした。

さらにもう一つ、「男たちを戦争に送り出すときに、母親は、息子の姿が見える間は駅のホームに立って元気に旗を振っていたが、見えなくなったら旗を地面に落とし、それとともに気持ちも落ち込んだように見えた。その息子を見送ったときに母親は何を考えていたのだろうか」という記事でした。

また、夏は避暑地の村で、ドロシー自身が日本語を教わり、逆に音楽を教えたりして過ごしていましたが、「村の男が軍隊に召集される知らせが役場に届いたら、みんなに知らせるためにサイレンが鳴らされ、家族には配達人がやってきた。日本語の先生の隣家のおばさんがサイレンを聞くたびに畑から走って帰ってきて、恐る恐る“配達人は私の家に来ましたか”と確認していました」。これらの3つの場面を通して、「彼らは何を考えているだろうか」とドロシーは読者に呼びかけています。「おそらく最も苦しむ人々は国家の政策に完全に共感していない人々、本当に起こっていることを知っている立場にある数少ない人々や、自分が愛している国について他の国が何を言っているかを知っている人々であろう。私は日本が正しいと信じることを要求はしない。要求しているのは、日本が中国と同じように苦しんでいると信じることである。…日本を考えるときに、個々の人間の視点から考えていただきたい。その中に激しく苦しんでいる人もいるし、誤っていると分っているからもっと苦しむ人もいる。彼らに対して、思いやり、共感、愛と赦しというキリストの態度を持っていたきたい。彼らは何を考えているか、どのように苦しんでいるかを理解するように試みて、そして本当の愛をもって、彼らのために祈っていただきたい。」とその記事は訴えていました。そして、「彼らは、悪い人ではない。彼らの立場に立って想像してみてください。」という声が繰り返して出てきます。

#### 〈資料〉

（電車に乗ったときに戦争で殺された息子の遺骨を埋葬するために運んでいる父親がいた。）世界のどこの父親とも同じく、日本人の父親は優しく、愛情に満ちている。…私がこの人を理解しようと努めている間に、義憤をもって日本という国を非難する他の国の人々も日本人を一人の人間として見て、私のように何人かのことを知って、この厳し

い時代の中で彼らの思いと苦しみを知ることができるようにと願っている。…

男たちを戦争に送り出すときに、ご両親、家族や、友人は何を考えるだろうか。…一人の小柄な母親は息子が自分を見ることができる間、駅のホームに立って、旗を振り、元気に応援していたが、見えなくなったら、旗を地面に落し、それと共に気持ちも落ちたように見えた。その息子を見送ったときに彼女は何を考えていただろうか。…

夏を小さな山村で過ごした。一人の男が兵隊に召集された知らせが役場に着いたら、サイレンが鳴らされ、家族に知らせるために配達人が送られた。日本語の先生が隣家のおばさんのことを私たちに話した。サイレンを聞く度に、畑から走って来て、恐れながら、聞く。「配達人が私の家に来ましたか。」…<sup>4</sup>

(“What Do They Think?” By an American in Japan (Dorothy Carver), *The Commission*, September 1938, 180-181.)

## ◇『日本ではまだ礼節が守られている』

そのあと定期帰国のためアメリカに帰り、1939年に長女のベッツィが生まれました。1940年に日本へ戻ってきますが、その時は、西南神学院が閉鎖され、日本バプテスト神学校が東京に開校していたので、福岡ではなく東京に住むことになりました。日本に戻って数か月後、アメリカ政府は在日しているアメリカ人に帰国するよう勧めていましたので夫婦で話し合い、ドロシーと娘が帰国し、ギャロットは日本に残るということに決まりました。ドロシーたちは1941年3月に出航する船で帰国しましたが、ギャロットは12月の真珠湾攻撃の後、抑留所に入れられ、翌年の6月までそこで過ごしました。

一方、ドロシーがアメリカに帰ると宣教師としての仕事がないということで、バージニア州リッチモンドで南部バプテスト女子後援会の刊行物『女子後援会の窓』(*The Window of Y. W. A.*)の編集員として記事を執筆していました。そのほか教会で様々な報告をしたり、キャンプや大会などにおいて日本で行った宣教師としての仕事の報告や夫ギャロットの仕事などを話していて、彼女はいつも日本を理解するようにとアピールしていました。そして、日本人に対する偏見などを無くそうというだけでなく、アメリカの社会問題にも触れたりしていました。

1941年5月の『日本ではまだ礼節が守られている』という記事で、ドロシーは1940年に日本に戻っていて、子どもが小さかったから食べ物を手に入れるのが大変でしたが、みんなが親切にしてくれたということを書きました。配給制度で物が無い時代でしたが、いろんな人が卵や食べ物を持ってきてくれたり、そして再び彼女がアメリカ

---

4 当日配付されたレジュメより抜粋。以下、引用は同じ。

に帰るときに大掃除を手伝いに来た日本人もいたと書いています。「日本人は無礼である」ということを耳にしますが、記事の中でまだまだ日本では礼節が守られているということを言っています。

〈資料〉

これは国家主義と国際的敵意が激しくなり、世界中を覆っていた時である。戦争状態になくとも、ほとんどの国は別の国を敵と見なすことになっている。そしてその国に住んでいる別の国の市民は仮想敵として扱われる。日本とアメリカとの関係は1年以上決して友好とは言えないし、それが間違いなく緊張していた時もあった。国際状況のため日本人のクリスチャンの仲間にとって、助けよりも恥や妨げになっていると感じたという主な理由で、この数カ月に大多数の日本で働いたアメリカ人の宣教師は帰国した。

(“Courtesy Continues in Japan,” *The Window of Y. W. A.*, May 1941, 4-5.)

ほかに、毎月多くの記事を書いていました。『酒？いえ、結構です』という記事は、若者が自分の結婚式でお酒は出さないという話で、『特に若者のために』は、日本の若者がクリスチャンになって、自分の家族にそのことを伝える話でした。『他の人はあなたが持っているものを欲しがるのか』という記事は、若い女性がある女性の下で働いていたときに、「なぜこの家はほかの家と違うのですか？」と聞いて不思議がるのに対し、「私たちはキリストを信じているから」と答える話です。『献げ物より良い』というのは、ウーン<sup>5</sup>に出版の仕事を継いだタメチカさんの話でした。タメチカさんは日本の砂糖会社で韓国支店のマネージャーとしてお金を稼ぐチャンスがあったにもかかわらず、それを断って神様が自分にお示しになった仕事をしようと聖書関係の出版を続けました。『結婚を延期する』というのは、下瀬清子さんの話です。福岡にある西南保母学院という幼児教育機関に父親とともに働いていて、この仕事が収まってからひと段落したら結婚するという話でした。『本気で喜ばしい挨拶』というのは、日本バプテスト連盟の荒瀬牧師と満州に行った天野牧師の挨拶のことを紹介しています。

◇『私に十分に良くなければ』

それから、『私に十分に良くなければ』という記事では、ドロシーが学生の英語弁論大会の付き添いで長崎に行った経験を書いているのですが、日本人の教師と学生と

---

5 E.N.ウーン (Ernest Nathan Walne)：アメリカ・南部バプテスト連盟から日本に派遣された宣教師で、1923年、西南学院第3代理事長。

いっしょに参加したときに泊まる予定のホテルを見て、「ドロシー先生、活水の宣教師の所で泊まった方がいいですよ」と言われたので理由を聞くと、「このホテルは、あまりよくないから」ということでした。「あなたたちはこのホテルに泊まるでしょう。あなたたちにとって十分であるならば、私にとっても十分です」とドロシーは答えました。これが我慢であるならば、私も我慢を共感していっしょに泊まるということです。「お互いに」や「隣人愛」などの言葉のように、「特別扱いはしてほしくない」、「同じような扱いをしてほしい」ということでした。

〈資料〉

【西南女学院の15歳の生徒が長崎で行われる英語弁論大会に参加するために出発し、ドロシーはもう一人の日本人の先生と一緒に同行した。泊まる予定のホテルを見てから、その先生はドロシーに活水の宣教師の家で泊まるように勧めた。】

…ホテルは典型的な日本の宿ではない、彼女の理想には程遠いものだと分った。私に十分でなければ、彼女にも十分ではない。彼女が「我慢する」なら、私は彼女の不便を共有できると思った。

南部に住んでいる若いクリスチャン女性の多くは、人を分断する社会的、人種的、経済的壁を気にしている。他の人種や階級の人のために何かしたいと思いながら、彼らが応答しないことにつながりすることがある。壁を越えるために「あなたがそれで良ければ私もそれで良い。あなたに十分に良くなければ、私にも十分ではない」という真摯な姿勢が必要である。イエス・キリストは隣人を自分のように愛しなさいと言われたのではないか。

（“If it’s not Good Enough for Me,” *The Window of Y. W. A.*, October 1942, 1-2）

## ◇『愛を通して状況を良くしていくことができる』

ドロシーが東京に住んでいた時に、近所の子どもたちはよく家に遊びに来ていました。周りの大人たちがこの子どもたちを見て、「なぜ外国人の家に遊びに行っているんですか。学校の先生に報告しますよ」と言って叱りました。その時は帰りましたが、2、3日経つと、また遊びに来ていました。子どもたちは、自分の友達と同じように接して対応したということで、その勇氣には、感銘深いものがあります。自分を愛するように隣人を愛しなさいという言葉があります。その人が自分とは関係がないと考えるとうまくいかない。どんな人でも自分と関係がある人である、他人を自分と同じように愛し、隣人として考えるのなら関係を立ち直らせることができるとこの記事でドロシーは書いています。

〈資料〉

イエスは「隣人を自分と同じように愛しなさい」と言われた。南部における黒人の状況を何回も調査を繰り返してやっても、黒人が白人のことをよく知っていても、この知識だけでは人種問題の解決に至れない。一世と二世の外国系のアメリカ人と長くアメリカにいる人との関係、資本家階級と労働者階級との関係、特権階級と恵まれない人々の関係、国と国との関係についても同じことが言える。

他人を私たちと「関係ない者」として考える限り、それは間違いである。他人を自分と同じように愛する「隣人」として考えるなら、関係を立て直すことが出来る。

（“Righting Situations by Love,” *The Window of Y. W. A.*, March 1942, 1-2.）

## ◇『有意義に抑留されていた』

ギャロットが抑留された経験を、「有意義に抑留されていた」“Profitably Interned”という言葉を使っていましたけれども、中国や朝鮮、フィリピンなどでは日本人によって抑留されたという報告が集まって来るようになり、ドロシーは日本に抑留されているギャロットの経験を紹介するようになっていました。この経験をもとに「抑留は神様の恵みであった」ということをギャロットは強く感じ、ひどい扱いを受けた人もいたと聞いていましたが、そういう扱いをされたわけではなく、親切にしてくれたことを強調しました。

〈資料〉

家族から離れた16か月後マックスフィールド・ギャロットはアメリカに帰ってきた。彼は日本人の友人に関する情報、安心感を与えるキリスト者の忠実に関する報告や、東京での抑留に関する話を持ってきた。

ベッツィと私は1941年3月、彼を日本に残したとき、彼が日本人によってどのように扱われるかについて大きな心配はなかった。私たちはクリスチャンの友人によってだけでなくノンクリスチャンによってもいつも親切と配慮で扱われていた。…

マックスフィールドが日本の抑留所で過ごした6か月はまさしく天からいただいたお恵みであった。

…悲惨な実態を描く話の信用を傷つけようと決して思わないでマックスフィールドの抑留体験を語る。他の話は真実だと確信している。香港では抑留所に食べ物が入りなかったことを知っている。朝鮮半島では拷問を受けた人もいた。日本でさえ抑留または監禁されたアメリカ人はひどい扱いを受けた。しかしそういう話はセンセーショナルなので広く公表されている。分かってほしいことはそれがすべてではないということである。東アジアで抑留された人の中には日本人から親切に優しく扱われた人もいたのである。

（“Profitably Interned,” *The Window of Y. W. A.*, November 1943, 5-6.）

## ◇『日本にいる神の鳥』

“God’s Ravens in Japan” (*The Window of Y. W. A.*, January 1943, 7-8.) は、一人の牧師がギャロットに言った言葉から来ています。旧約聖書では預言者エリアが食べ物になかった時にカラスが持ってきてくれて、それで養われていたという話が出てきます。その牧師が、ギャロットに「日本にもそんなカラスがいる」ということを言っていました。ギャロットは、アメリカに強制帰国させられる前の3日間は荷造りをするために抑留所から自宅に帰ることができました。その頃、食料は配給されていましたが、食料の配給を受けるために並んだりしないとギャロットは決めていました。それを聞いていろんな人が食べ物を持ってきてくれました。いっしょに後片づけをしてくれた人の分まで持ってきてくれました。その上、食べ物ばかりではなく、友人や西南はどうなっているかといった貴重な情報も持ってきてくれたのです。神様がいろいろの準備をしてくださったというお話でした。

### 〈資料〉

「鳥」のもたらした食べ物に物質的な糧以上のものがあつた。食べ物を持って来なくても、彼らが来ることだけは、国が互いに戦争をしても、アメリカ人の宣教師との友情を大事に思っていることに対する疑えない確信を与えた。彼らは友人が大丈夫かどうか心配していて、会うために家に来ることを恐れなかったし、恥とも思わなかった。彼らは彼がアメリカに出征する前に会い、一緒に時間を過ごしたかった。

彼は楽しませてくれるもう一つのものを持ってきてくれた — 情報 — 彼らと他の友人に関して、学校と教会に関する情報。教会の報告は希望をもたらずのものであつた。

(“God’s Ravens in Japan” *The Window of Y. W. A.*, January 1943, 7-8.)

## ◇『神への信仰以外…』

ギャロットは、アメリカに帰国してテキサス州のヒューストンで日系人といっしょに働きました。そのあと1943年に長男ウィリアムが生まれて、その年の9月から1946年1月までアーカンソー州の収容所の教会の牧師として働き、ドロシーも収容所の学校で教師として教鞭をとりました。そこで、次女のアリスが生まれました。その収容所が閉鎖されてからハワイに行って、そこから日本へ1947年に戻ってきました。これは雑誌に出てきた日本人収容所の写真です。バラックがたくさん並んでいる様子が分かります。一部屋で家族全員が暮らすということで、プライバシーというものはなく、カーテンを引いたりして過ごしていたようです。



アーカンソー州にあったローワー収容所

これは若い女性向けの雑誌ではなく、伝道局の雑誌の記事ですが、ギャロットが書いたもので『神への信仰以外…』“…but Faith in God”という原稿です。彼が日系人と働いていると、バプテスト教会の牧師や教会員たちは、この人たち日系人は敵であるからあまり関わりたくないと言っていました。しかし、ギャロットは、「敵を愛しなさい」という言葉をよく使っていたように、「この人たちはあなた方の敵ではないんです。彼らはもうアメリカ人ですよ」と強調していました。「キリストの思想と力が彼らの生活で見えている。そういう試練を受けている人から学ぶべきだ」とギャロットは考え、彼らが財産や自由などを奪われており、彼らを見ているうちに多くを学んだとも語っていました。

〈資料〉

今日の世界に必要なのは神に対する信仰である。全てを損失したこの人たち（日系人）何人かがキリストを知ることのあまりのすばらしさに、一切を損失したと見なすことを学ぶことが出来るなら、彼らはアメリカや日本に必要なことを与えられる立場になるであろう。

世界にとってイエスの「敵を愛しなさい」の意味を知る必要があるだろう。この人たちは私たちの敵ではないが、今日の生活の憎しみの混乱に陥っている。

今の世界が財産と物質主義の問題、または自由と個人の権利に悩まされているだろう。日系人の物質の喪失と投獄は、私たちにその問題を再認識させる。

この一つ一つの問題に関して最も重要なのは、キリストの思想と力の適用である。実際に試練を受けている人々は、その体験を通して解決を発見できる。

発見ができたときに、私たち皆はその知恵をいただく準備が必要である。私たちアメ

リカ人は富裕の女神の役割を果たしたが、与えるだけでなく、いただく準備もなければ、私たちは人種問題の解決およびキリスト・イエスによる本当の兄弟姉妹愛を学ぶことができない。東京にいる牧師が言うように、「十字架の真下の土は平らであり、誰も他の人より上に立つことはない。」お互いに与えたり、もらったりする姿勢は戦後の宣教活動に対して非常に重要である。

私たちの間に住んでいる日本人や日系人だけが試されているということを感じておいてほしい。私たちも試練を受けているし、私たちも世界の問題にキリストの思想と力を適用する機会に恵まれている。この状況の中で一つの欠点を補うのは、誰よりもこの国にいるクリスチャンたちがひどい扱いを見たときに抵抗して、移住させた人々に再定住の機会を与えるという具体的な方法によって友情を示し、教会やその会員が再定住プログラムで近くに住み働きに来た人々にキリストによる友情を示すことである。

「神への信仰しか残っていない。」移住センターにいる人々に起こった試練の大きさによって、彼らは神への十分な信仰、奪われた財産よりも大きな宝物、有刺鉄線や無視された人権に決して制限できないキリストによる自由を見出し、他の人に分かち合うことが要求されている。私たち自身が国内でクリスチャンらしく生き、世界でキリストの証をする資格を得られるように祈ろうではないか。

(W. M. Garrott, "…but Faith in God," *The Commission*, March 1944, 8-9.)

ギャロットは、東京の牧師の言葉を引用して、十字架の真下の土は平らであり、誰も他の人より上に立つことはないし、与えたり、もらったり、これがお互いの関係にならないと宣教活動はできないと言っていました。収容所にいる日系人だけが試されているのではなく、私たちも「本当にキリストの思想、キリストの愛を示しているか」という点で試されているし、彼らが収容所から解放されたときに自分の所へ来たら、彼らを受け入れてくださいと語っています。また、バプテスト大学だけでなく、様々な大学で若者が将来、勉強を続けるように収容所から出て行って、家族で仕事や住む場所が見つけれれば、収容所から出ていくことができました。ギャロットは、ネットワークを使っている人々に、彼らのために仕事やアパートを用意してくれるようお願いして回りましたが、それがキリストの愛を理解できることでもあると言っていました。彼らは収容所で財産や自由などいろんなものを失ったけれども、大事な宝物を手に入れている。収容所で自由を奪われていてもキリストによる自由を見出すことができている。そんな彼らから学ぼうと語っていました。

最後に他の執筆者の記事、若い女性を対象にした雑誌にドロシーが頼んだ記事がたくさんあります。収容所の中の経験や日本での習慣や文化を紹介し、日系人への理解を求めようとしていました。直接、西南学院の歴史とは関係ありませんが、ギャロット夫妻の姿勢に、彼らの立場がよく見えてくると思います。敵に対する愛、兄弟愛、

隣人愛を語るだけではなく、本当に生き方で示そうとしていました。そして日本人とアメリカ人、または日系人とアメリカ人の懸け橋になる仕事をしていたということが、この記事の中で見えてくると思います。

(以下は、発表後の質疑応答)

- Q. 当時、宣教師の先生は、日本の軍国主義や天皇制に対してどの程度理解していたのか、あるいは天皇制をどう思っていたのか知りたいのですが、なかなかその資料がなくて困っています。そのあたりはどうでしょうか？
- A. その辺は明確に分からないのですが、ギャロットは平和主義者でしたから、軍国主義に対しては反対の立場でした。ギャロットがアメリカに入国しようとしたときに、「あなたはアメリカのために戦いますか」と質問され、「しません」「それでは、日本の味方ですか」「いいえ、そうでもありません。私は戦いませんし、戦争に参加もしません」と答えたために、なかなか入国手続きがスムーズにいきませんでした。戦争が激しくなった時にギャロットらはアメリカにいましたので、軍国主義的な学校行事に参加することはありませんでした。ひとつ私知っているのは、グレーヴス<sup>6</sup>が西南女学院の教師であったときに「宮城遥拝でお辞儀はしない」と常々口にしていたので周りの先生たちが心配して、そんなことを言うのと逮捕されるかもしれないと、福岡に移るように忠告しました。そして間もなく病気の宣教師ナオミ・シェル<sup>7</sup>に付き添ってアメリカに戻りました。宣教師らは、納得できずに苦しんでいる人々、拒否している人々に焦点を合わせていました。
- Q. 資料の中に、日米関係の悪化でアメリカ政府がドロシーに帰国を勧めたとあって、自分たちがあえて日本に留まるとかえって妨げになるというような理由で大多数のアメリカ人の宣教師が帰国したということは分かったのですが、逆に日本政府が何らかの圧力をかけたというようなことはなかったのでしょうか。また歴史的な事実として日本の政府そのものが、帰国を命じたという事実はありませんでしょうか。

---

6 A. グレーヴス (Alma O'Norean Graves)：アメリカ・南部バプテスト連盟の宣教師で、1936年に来日。西南学院高等学部教授に就任し、1976年に定年退職するまで、通算38年の長きにわたって西南学院の英語教育に尽力した。

7 ナオミ・シェル (Naomi Schell)：アメリカ・南部バプテスト連盟の宣教師で1921年から1946年まで来日。主に北九州で宣教活動をしたが、一時期、西南学院中学部で音楽を教えた。

A. ギャロットたちは東京にいたために、それほど感じたことはなかったと思いますが、福岡ではワトキンスやドージャーたちは家から出ることができず、いつも警察が見張っていたということがありました。最初の頃は、ワトキンスのお母さんと監視の警察官が顔なじみになって、お茶を出したりしていたんですが、徐々に厳しくなると家から出ることができないようになりました。そして、日本人が尋ねていくと、警察から話の内容などを聞かれていました。「もしあなたたちが逮捕されていたら、私たちは何もできないから、もうアメリカに戻ってください」ということでした。それでなるべく日本に近いハワイに移りました。ワトキンスの資料の中で、「いつ戻るのか。みんなアメリカに帰国しているからあなたも帰りなさい」とアメリカ政府から忠告を受けました。日本国内で英語の文字が見えなくなったというような心理的なプレッシャーはあったでしょうが、日本政府から帰国しなさいということにはなかったと思います。

この原稿は、2015年3月3日に行われた百年史研究会の発表を書き起こしたものである。